トライチュケ対グレーツ

――ベルリン反ユダヤ主義論争 2 ――

Treitschke contra Graetz: Der Berliner Antisemitismusstreit 2

平　山　令　二

要　　旨

1879年11月にベルリン大学教授ハインリヒ・フォン・トライチュケが発表した論文「我々の展望」は，「ユダヤ人は我々の不幸だ」という言葉に象徴されるあからさまな反ユダヤ主義的姿勢により，ベルリンを中心として大きな論争を巻き起こした。当然ながら，多くのユダヤ人学者やジャーナリストがトライチュケの論文に激しい批判を浴びせた。とりわけトライチュケがユダヤ人の「傲慢さ」の象徴として批判した『ユダヤ史』の著者ハインリヒ・グレーツはトライチュケの論文に反発し，トライチュケによる歴史的事実の意図的な誤認と彼の反ユダヤ主義的な歴史観の両面にわたり厳しく批判した。これに対して，歴史家としてのプライドを傷つけられたトライチュケも激しい反論を行った。反論のなかでトライチュケは，グレーツとの論争が反ユダヤ主義論争の核心にあるものを示している，と書いている。ベルリン反ユダヤ主義論争のもっとも重要な論争であるトライチュケとグレーツというふたりの歴史家の主張を紹介したい。

キーワード

反ユダヤ主義，ユダヤ教，国民国家，セファルディ，アシュケナージ

前回紹介したハインリヒ・フォン・トライチュケが1879年11月15日に発表した論文「我々の展望」は，「ユダヤ人は我々の不幸だ」という言葉で象徴されるように，ドイツ社会におけるユダヤ人の存在に根底から疑問を投げかける内容で，当時のドイツ社会に大きなショックを与えるものだった。

著名なドイツ史学者のベルリン大学教授トライチュケによるセンセーショナルな反ユダヤ主義的論文は多くのユダヤ系知識人からの反発を招いたが，他方でドイツ統一により高揚したナショナリズムに駆られた保守派からは大いに歓迎されることになった。この論文によりいわゆる「ベルリン反ユダヤ主義論争」の火ぶたが切って落とされたのである。

今回は，トライチュケの論文のなかで特に名指しされ批判されたユダヤ人歴史家ハインリヒ・グレーツのトライチュケへの反論，さらにはそれに対するトライチュケの反論，最後にグレーツの再反論を読んでいきたい。「ベルリン反ユダヤ主義論争」の骨格となるものが何であるかが，もっとも分かるのが両者の論争だからだ。

1

グレーツは，トライチュケの論文が掲載された翌月の1879年12月７日に「フォン・トライチュケ氏に対する反論」を公表している[1)]。

グレーツは冒頭で「あなたは『プロイセン年鑑』11月号の政治的論考でドイツのユダヤ人に対してほとんど歯に衣着せぬ攻撃を行った」と書いて，以下のように続ける。

*

あなたの論考は，ある種の誤解しようのない言い回しから根本において全ユダヤ人に対する告発です。この告発を防ぐことは今回の私の任務ではありません。しかし，このことだけは我慢できません，「ユダヤ人は我々ドイツ民族にとっての不幸だ」というあなたの思慮のない言葉をドイツ民族の守護霊が許してくれますように。あなたはこの言葉でドイツ民族の自尊心をほとんどくすぐることのない証明書を発行したことになりますが，ドイツ民族は粗雑なこの証明書を不機嫌に突き返すことでしょう。なぜでし

ょうか。4,000万のドイツ人がほんの一握りのユダヤ人によって堕落させられ風紀を乱される危険があるというのですか。これはドイツ民族に加える罵詈雑言ですし，ドイツ民族に完全な民族感情を認めないことになり，この英雄民族をそもそも侮辱することです。フランス人やロシア人はどう言うでしょうか。あなたの言うところの激高している時代に，あなたが「ユダヤ人は我々ドイツ民族にとっての不幸だ」というスローガンで弱小なマイノリティに対する大衆のファナティズムをかき立てることに躊躇しなかったことを，人類の守護神が許されますように。幸い現状は違っています。ユダヤ人を攻撃する運動は決して深いものでも大きなものでもありません。あなたが加わっている反ユダヤ主義の声を数えてみるか量ってみてください——それもユダヤ人に好意的な声と比較することなく——そうすれば，反ユダヤ主義の声は取るに足らないもので散発的なものでしかないことに気づかざるを得ないでしょう。ブレスラウの事後選挙の結果は決してなにかの兆候ではなく，選挙策略の失敗の結果でしかありません。——これはしかし，ここで取り上げるべきことではありませんが。

ただ歴史家に対する歴史家として，あなたが提起した反ユダヤ主義の根拠のいくつかを解明したいと思います。あなたはユダヤ人への反感に関してタキトゥスの反ユダヤ主義の言葉「人類の敵」を引用しています。しかし，あなたに知っておいていただきたいのは，偏狭なローマ貴族の歴史家がこの表現をキリスト教に対してしか使っていないことです，ネロの治世でのキリスト教徒の迫害について「キリスト教徒は放火の罪よりもむしろ人類に対する憎しみの罪を暴かれた」と述べている箇所です。あなたはさらに，西と南のユダヤ人（あなたの言う紳士的イスラエル人），すなわちフランス，イギリス，イタリアに住んでいるユダヤ人は，比較的誇るべき歴史のために西洋の流儀にかなり容易に適応することができたので，高貴な人間であり良き愛国者である，それに対してドイツのユダヤ人は，「何百年も

のキリスト教の圧政による傷痕をつけられているポーランド系ユダヤ人の血統なので，経験上ヨーロッパ，特にゲルマン的本性に対しはるかに異質なものとして対立している。」悪く思わないでください，これは歴史的事実に関する誤りです。あなたが読んだと主張している私の歴史書が，この点に関してもっとましなことを教えることができたでしょう。フランスのユダヤ人の多くがドイツ出身であることを別にしても，スペインとポルトガルのユダヤ人の方が「キリスト教の圧政」にポーランドのユダヤ人よりとてつもなくひどくまた長く苦しんだのです。ポーランドのユダヤ人は定住し始めた時代から王たち，領主たち，それにまた民衆の間でも容認されていました。17世紀になって初めて彼らは血なまぐさい迫害を被りました，しかし，それもポーランド人によるものではなく，野蛮なコサックの徒党によるものでした。聖餅冒涜とキリスト教徒の子ども殺害を理由にしたユダヤ人大虐殺は，ポーランドではきわめて稀で，国外追放も一度も行われませんでした。これに対してピレネー半島のユダヤ人は14世紀から血なまぐさい迫害を被り，ユダヤ人の大部分が国を追われ，少数のユダヤ人が激高したキリスト教徒の野蛮さにより強制的にキリスト教徒に改宗させられることで，迫害はようやく終わりました。改宗ユダヤ人に対して18世紀に入るまで火刑の炎とサン・ベニトの屈辱が荒れ狂いました。このマラーノという一族，暴力的に改宗させられたユダヤ人から，何百年にもわたるキリスト教の圧政の傷痕にもかかわらずヨーロッパの本性に馴染んだ南と西のイスラエル人の大部分が派生しています。ポーランドから移住したユダヤ人はしかし，いかなる傷痕も持ち込みませんでした，また上部シュレジア地方のヴァッサーポラック人やドイツの他のスラブ系少数種族よりもゲルマン化していましたし，比較にならないほど愛国的でした。

下着売りのポーランドの若いユダヤ人の流入に関するあなたの主張も誤りです。東方からドイツに現在流入しているユダヤ人の数がどんなに少な

いか，統計学者があなたに数字をあげて証明してくれるでしょう。ガリツィアではユダヤ人は実際に同権を完全かつ無制限に享受しています，そのため国外に移住する気持ちはほとんどありません。彼らの知的な息子たちが士官まで昇級することも稀ではありません。ロシアは兵役義務のある若者が国境を超えることを認めていません。それなのにどこから下着売りの若者がやって来ると言うのですか。あなたの主張は統計的な根拠に関しても歴史的な根拠とまったく同じように不適切です。このことはしかし付随的な問題に過ぎませんが。

ここでは主に私自身に関わる問題を取り上げたいと思います。あなたは私の『ユダヤ人の歴史』を無責任にも反キリスト教的であると弾劾しました。あなたより高貴な考えを持つすべてのキリスト教徒が私の歴史書12巻を読んでしまったか，あるいは読むだろう，そしてあなたがきわめて断定的に述べた告発を信じるかもしれない，と仮定することは許されませんので，私は無実の意識が与えてくれる厳しさであなたの告発に正しい光を当てざるを得ません。私の歴史書には「天敵」Erbfeind であるキリスト教に対するファナティックな怒りが含まれている，というあなたの表現は，議会の言い回しを使えば，不法です。あなたが強調したこの言葉は，私の歴史書のどこにも書かれていません。しかも私が問題としたのは現在のことではなく，過去のことです，私は私の民族，同じ宗教を信じる仲間たちに対して何千回も繰り返された血なまぐさく情け容赦のない迫害を述べなければなりませんでしたし，真実の通りに述べようと思いました。私は歴史を捏造しなければならなかったのでしょうか。あなたがもし私のユダヤ人の歴史を読んだとするなら，原始キリスト教についての記述も読んだはずです。そこにほんのわずかでも不愉快な言葉を見つけましたか。ただし，私は後期キリスト教についても，偽りのキリスト教，愛の欠如，冷酷な心，虐殺のキリスト教についても話さなければなりませんでした，それは師の

言葉である献身的な人間愛，優しさ，謙虚さを否定したキリスト教です。このようなキリスト教によりユダヤ人が被った何千もの苦しみを描写しなければなりませんでした，感情の熱気とともに描写しました，そして歯に衣を着せませんでした。あなたご自身がユダヤ人迫害の原因を「キリスト教の圧政」と呼んでいるならば，どうして私がその原因を黙っていたり，ごまかすことが許されるでしょうか，その原因を私は直接の殉教伝から知ったり，死ぬほど血を流した人々の喘ぎ声の証言記録から知ったのですから。

「ルターから下ってゲーテ，フィヒテに至るまさしくドイツ的本質のもっとも純粋でもっとも強力な代表者たちにまさに向けられた死ぬほどの憎悪」を含んでいる，というあなたが私の歴史記述に対して行った度外れた弾劾は不法です。私は逆にこれらの英雄たちの驚異的な偉大さに正しい光を当てたのです。ルターについて私はこう書いています（第９巻，191頁以降），「彼の性質は神に浸透され，この時代には例を見ないほどの神，信仰の要請への献身……けがれない生活と真の謙虚さに支配されていた！」この言葉が死ぬほどの憎しみを発散しているのでしょうか。ルターの小品「イエスは生まれながらのユダヤ人だった」から，まさに時宜に適した箇所（211頁）を私は引用しています。「我らの愚者たち，教皇主義者たちは，……これまでユダヤ人たちをひどく扱ってきたので，良きキリスト教徒であったならユダヤ人になりたいと思うだろう，そして私がユダヤ人で，そのような間抜けがキリスト教徒を支配し説教しているのを見たら，キリスト教徒よりむしろ豚になろうとしただろう。」しかし，このようなことをルターが書いたからといって，ルターが20年後に台頭してきた分派主義者に対する戦いの熱狂のなかで，また匿名のユニテリアン（その背後にはユダヤ人作家がいるとルターは想像していました）の論争文に刺激され，彼自身の言葉に矛盾してユダヤ人に対する無慈悲な言葉を書き，説教したことを黙っていてよいの

でしょうか。ルターは，ユダヤ人のシナゴーグを取り壊し，ユダヤ人から聖典までも奪い，ユダヤ人の家を破壊し，ジプシーのように家畜小屋に押し込めるように，またもっと酷いことをするように要求しました。あなたはルターが誤ることはないと主張されるわけではないでしょう。忠実な歴史叙述のなかに中傷を探すことがそもそも歴史家にふさわしいことでしょうか。

あなたがゲーテとフィヒテに関して私の歴史書を非難していることも同様に不法です。前世紀末にフランスとオランダのユダヤ人がすでに完全に同権で，ドームがドイツのユダヤ人解放に役立つ画期的な論文を出版したとき，ここドイツでは先ずユダヤ人の肉体深く食い込んだ鎖を解くこと，ユダヤ人を豚と同一視する人身税を廃止することが問題だったのです。ふたりのドイツの力強い精神に，クロップシュトックが発したような人間性の力強い言葉を期待してはいけなかったのでしょうか。しかし，その代わりにゲーテとフィヒテは反ユダヤ主義的であることが明らかになりました。彼らについて私はこう言っています，「第一級のふたりの男，その時代のもっとも偉大な詩人ともっとも偉大な思想家，ゲーテとフィヒテ，ふたりともキリスト教とはそりが合わず無神論者と見なされたが，それにもかかわらずイエスの名前でユダヤ人を嫌悪した。」このように歴史的事実を述べることが，「死ぬほどの憎しみ」になるのでしょうか。

その他，あなたはベルネとハイネから始まるドイツ語散文の洗練化についても異議を唱えていますが，これは趣味の問題です。ドイツ語文体に及ぼす彼らの影響を話すことも，「死ぬほどの憎悪」という非難を受けざるを得ないのでしょうか。

あなたが何度も口にするユダヤ人の思い上がりに対する告発状を持って，イギリス帝国の現職総理大臣ビーコンスフィールド卿（ディズレリー）といっしょに法廷に行ってください。ユダヤ人で民族主義的な信念を強く持っ

た現代の文学者でも，ディズレリーの著書に何度も現れるような誇りに満ちた文章を書いたことはありません。「あなた方はコーカサスの出自の純粋な人種を破壊することはできない。このことは，エジプトとアッシリアの王，ローマ皇帝とキリスト教の異端審問官を恥じ入らせた生理学的な事実，自然法則なのだ。どんな刑法もどんな物理的拷問も，上位の民族が下位の民族に飲み込まれたり破壊されたりするようにはできないのだ。」あなたもビーコンスフィールド卿あるいは自然法則と争ってごらんなさい。

最後にあなたにひと言だけ言っておきたい。あなたは私をファナティカーと名づけた。自分を深く省みれば，ファナティカーがどこにいるのか，気づかざるを得ないでしょう。

1879年12月７日

2

グレーツのこのような反論に対して，トライチュケはすぐに再反論「グレーツ氏とかれのユダヤ主義」を書く[2)]。冒頭でトライチュケは「私がドイツ年鑑において最新の日常政治の概説をドイツのユダヤ人についてのいくつかの所見で締めくくったとき，新しいことを述べるという野心はまったく抱いていなかった」と前置きして，「むしろ８年前に歴史・政治論の第４版で述べた考えをより詳細に述べたに過ぎない」と続けて，自分の反ユダヤ主義を薄めておいてから，グレーツの批判した点に逐一反論を試みる。以下，トライチュケの反論を主要な論点に分けて整理してみよう。

①「逆向きのヘップ・ヘップの叫び」

トライチュケは11月15日の論文で，最近のユダヤ人の動向は傲慢であるとして「逆向きのヘップ・ヘップの叫び」という表現を使った。「ヘップ・ヘップ」とは19世紀初頭に南ドイツで発生した反ユダヤ暴動であり，ユダ

ヤ人への暴行やユダヤ商店の略奪などが行われ，ドイツ全土に広がった。トライチュケはそれを意識して，同時代のユダヤ人の「傲慢な動向」を「逆向きのヘップ・ヘップ」と誇張して表現したわけである。

トライチュケは自分がそのような表現を使用した意図を，「今日，間違いなく我が善良な民衆の心をつかんでいる反ユダヤ主義運動は，単なる野蛮，嫉妬，民族的・宗教的な偏見によるものではなく，ドイツのユダヤ人の一部に見られる傲慢さの増長が，これまで行われたユダヤ人解放を少しも変更する気のない国民各層にまで深い憂慮と重い不快感を呼び起こした……ということを示そうとしただけである」と説明する。その上で「自分の卒直な言葉が激怒した反論の嵐を巻き起こしたということは，その存在が否定されようとしているユダヤ問題が実際に存在していることの証明」である，と開き直ったように反論する。さらに，自分に向けられた「これらすべての反論は共通して完全な独善である」と断定する。その断定の根拠として，「反論のどれひとつとして，ユダヤ人の態度それ自身が現下の騒擾にいくらかでも責任があるのではないか，という疑問を投げかけていない」という点をあげる。さらにもうひとつの理由もあげる。

「大部分の反論ではさらに，それらの著者が私のわずか 4 頁の短い論文を読む労さえ取っていないのに，新聞が論文から切り取ったいくつかの文章を根拠にして，ドイツ語の最高級の激怒の言葉を私に浴びせかける権利がある，と思っている」とトライチュケは非難する。そのような攻撃がなされるのも，自分が主張していた「ユダヤ人の文士たち」がジャーナリズムを牛耳っている事実の「おあつらえ向きの証拠であり補足」である，と我田引水の結論を出す。

トライチュケは「自分の主張で緩和する箇所は何もないし，撤回することもない」として，すべての反論にいちいち応答することは読者の忍耐を超えるだろうから，という理屈で，グレーツ教授の公開状だけを取り上げ

ると述べる。グレーツの反論のみを取り上げるのは，「この著者の思想を考察することが，この論争でそもそも何が問題になっているかということを我々の読者にきわめて明確に示す格好の機会を与えてくれるからである」と説明する。このように，トライチュケはグレーツとの論争を自分のユダヤ批判を説明し宣伝する最良の機会ととらえていた。

② ドイツと他のヨーロッパ諸国におけるユダヤ人の人口の比較

トライチュケが，ドイツにおけるユダヤ人の割合は他のヨーロッパ諸国よりずっと多い，と主張したことに対して，グレーツは，最近ユダヤ人の流入が減っていることを統計学者が教えてくれた，と書いていた。これに対してトライチュケは反論する。まずグレーツがその統計学者の名前をあげていないことを指摘し，現在は経済危機のためにユダヤ人の流入が一時的に減っているだけで，もっと長いタイムスパンで判断しなければならない，と主張する。さらに1871年の統計では，ユダヤ人はスペインでは6,000人，イタリアでは40,000人，フランスでは45,000人，イギリスでは45,000人であるのに対して，ドイツ帝国では512,000人であり，ベルリンだけでユダヤ人はフランス全土のユダヤ人と同数だ，と述べる。さらにユダヤ人の数は急速に増えていて，プロイセンにおいて1816年に123,971人だったのに，1846年には214,857人，1875年には339,790人に急増している。ユダヤ人の比率も，1816年にはプロイセンでは人口の83分の１だったのに対して，1846年には75分の１と割合が増えている。1867年には割合は77分の１で見かけ上は減少したように見えるが，ユダヤ人が比較的少数である地域がプロイセンに併合されたからであり，全体として1816年以来ユダヤ人の人口は急増している，とトライチュケは主張する。

さらにトライチュケはユダヤ人の急増だけが問題ではなく，「ユダヤ問題」には他の要素があると主張する。ユダヤ人の人口増がそのまま彼らの

社会的権力の強化につながるわけではない。ユダヤ人が帝国の僻遠の地から都市部に流入することが，ドイツの日常生活に比較にならぬほどの大きな影響を及ぼす理由である。ほんの数十年前には，ユダヤ人がひとりもいなかったか，ほとんど取るに足らない数しかいなかった多くの都市で，今はユダヤ人の経済的権力が確立している。さらに，ユダヤ人は平均して豊かなのでキリスト教徒の大衆よりも子どもたちによい教育を授けることができる。プロイセンのギムナジウムでは，1875年にユダヤ人生徒の割合は9.5分の１であり，第１級実業学校では10.26分の１である。近い将来に教養あるプロイセン男性のうちでユダヤ人の占める割合は10分の１になるだろう。新聞雑誌と社会のほとんどあらゆる層へのユダヤ人の強い影響力，株式市場の性格，ドイツ帝国銀行中央委員会の構成などを考慮すると，ドイツのユダヤ人は西欧のどの国よりも強い勢力を持っていると認めなければならない。このようにトライチュケは，ユダヤ人の数の問題から論点を影響力の問題に広げていこうとする。

③　スペイン・ポルトガルのユダヤ人とドイツ・ポーランドのユダヤ人の比較

トライチュケは最初の論文で，スペインやフランスなど西欧のユダヤ人（いわゆるセファルディ）はキリスト教文明によく馴染んでいるのに，ポーランドやドイツなど東欧のユダヤ人（いわゆるアシュケナージ）はキリスト教文明を頑なに拒否しているとし，その差は後者には「キリスト教徒の圧政」に苦しんだ長い歴史がありその痕跡を身に受けているからだ，と主張していた。これに対して，グレーツは反論し，「キリスト教徒の圧政」により苦しんだのはスペインのユダヤ人であり，イスラム教徒の君主のもとでは信仰が認められていたが，レコンキスタ後にはユダヤ人は国外追放になるか，暴力的に改宗させられるかして，改宗後も異端審問にかけられ火刑になる

など厳しい圧政が続いた，と反論する。他方，ポーランドのユダヤ人は比較的寛容に受け入れられ，国外追放などもなかった，と述べて，「迫害の痕跡」を身につけているのは，ポーランドなど東欧のユダヤ人ではなく，スペインなど西欧のユダヤ人の方だ，と主張した。

以上のグレーツの反論を受けて，トライチュケは，スペイン・ポルトガルのユダヤ人は「比較的誇るべき歴史」を持っているが，ドイツ・ポーランドのユダヤ人は「何百年ものキリスト教徒の圧政を深く刻印している」と対比的に述べたことの歴史的根拠を持ち出す。スペインのユダヤ人はイスラムのウマイヤ朝の支配下で文学的興隆期を経験し，市民的快適さと名声を享受し，戦争の英雄さえ生み出した。しかし，その後キリスト教王の下で言葉にできない苦しみを味わったが，それはまた感動的な殉教の力を感じることでもあった。他方，ポーランドのユダヤ人は形式的にはより穏やかだが，実質的には破滅的な恣意的支配の下で「怪しげな幸福」をあてがわれた。サルマート人貴族がドイツ市民を古くからの農場や都市部から追い出したあと，ユダヤ人がその空いた場所を占め，ポーランドで形成されることのなかった市民層のさまざまな仕事を果たすようになり，金融をも支配するようになった。また，ユダヤ人は妨害を受けることなく自らの宗教や習俗を保持することもできた。しかし，その代わりに日々，ポーランドの大貴族や下級貴族から踏みつけられていた。

トライチュケはこのような対比を述べた上で，誰かを傷つけたくないので，両ユダヤ人の対比から何らかの結論を出すことは意図的にせずに，結論は読者に任せた，と弁明する。そう言っておきながら，トライチュケは，「経済的にはそれなりに豊かでも，何百年間もの奴隷状態はある民族の性格に，大きな苦しみや戦争に満ちた歴史よりも重大な傷をつけることになった」と，ポーランドのユダヤ人の傷痕の方が深い，という自分の主張を繰り返す。さらに，西洋の歴史は，誤りや逆行が多くあったにせよ本質的に

自由の歴史である，とヘーゲルの歴史哲学をなぞり，したがってマラーノの歴史の方がポーランドのユダヤ人の歴史よりも西洋の本質に近い，とトライチュケは性急に断言する。

④「人類の敵」

トライチュケは，ユダヤ人がヨーロッパの諸民族に完全に馴染んだことはない，両者の対立は解消不能で緩和することしかできない，両者の対立は太古の歴史にもその証拠がある，と自説を繰り返す。トライチュケは最初の論文で，タキトゥスの「人類の敵」という有名な言葉を引用し，この言葉をユダヤ人への非難と解釈した。この解釈に対し，グレーツがこの言葉はユダヤ人に向かって言われたものではなく，キリスト教徒に向かって言われたものだ，と反論した。トライチュケは，グレーツのような歴史家なら誰でも周知のことだが，トラヤヌス帝の時代までキリスト教はユダヤ教の一分派と見なされていた，と反論する。タキトゥスの叙述しているネロの時代には，キリスト教徒はしばしばJudaiと呼ばれていたので，「人類に対する憎しみ」という言葉は，旧ユダヤ人と新ユダヤ人すなわちキリスト教徒の両者に等しく向けられていた，とトライチュケは主張する。タキトゥスの言葉は，若い世界宗教（キリスト教）に対する古代市民の宗教的，政治的な反感と，西洋の人々のユダヤ人憎悪というふたつの事実の証拠である，とトライチュケは自己流の解釈をする。

このようなユダヤ人憎悪は古代後期のほとんどすべての作家に見て取れる，とトライチュケは書いて，同じ感情がその後もすべてのゲルマン民族，ラテン系の民族のなかにも生きていた，と続ける。トライチュケは，どうして西洋の「高貴で才能に恵まれた多くの民族」が彼らの魂の奥底でまどろんでいた「野卑な，それどころか悪魔的な力」をユダヤ人にばかりぶつけたのか，と自問する。トライチュケによれば，その答えは以下の通りで

ある。

「その答えは簡単だ。ユダヤ民族は世界中に離散してから解決不能な内的矛盾を抱えている，国家を持たない民族の悲劇的運命に従っていることだ。ユダヤ人は常に西洋の法律の保護のもとに暮らそうとしてきたし，西洋の交易から利益を得ようとしてきた，それにもかかわらず厳格に隔離された民族であることも求めてきた。そのような態度は，しかし国家統一の厳格な必然性と真正面から対立するものであり，常に新たな争いの種になるものだった。」

⑤　国民としてのユダヤ人

トライチュケは，ユダヤ人の同権はヨーロッパの文化国家のすべてでとうに実現していて，ドイツでそれを元に戻そうという分別のある政治家はいないし，ユダヤ人はその祭礼を妨害なく行う自由を享受している，と述べる。トライチュケはその上で，完全な解放が行われたことにより，独自の国民として認められるというユダヤ人の古くからの要求は完全に根拠のないものになった，と断定する。今世紀における民族国家形成にユダヤ人が平和的かつ道義を促進する役割を果たせるのは，その言語をユダヤ人が話している文化民族に統合されることを決心する場合のみである，と述べ，ドイツのユダヤ人の一部はそう決心し行動しているが，他の一部のきわめて影響力のあるユダヤ人は全くそう考えていない，と断定する。その証拠としてグレーツの『ユダヤ史』第11巻をあげる。

グレーツがレッシングを「ドイツがこれまでに生んだもっとも偉大な人物」と書いていることに対しても，「根本的に誤っている」とトライチュケは反論し，熱心なイスラエル人の口からそう言われることはよく理解できるが，と続ける。このようなユダヤ人がキリスト教についてしばしば厳し

い批判をすることも，ユダヤ人迫害に関する多くの悲しむべき事実を書かなければならない立場にあるユダヤ人歴史家に対しては大目に見なければならない，と「寛容な」姿勢を示した上で，トライチュケはグレーツにふたつの要求を向ける。

> 「ドイツ人同胞の圧倒的多数が信じる宗教に対するグレーツの論難が自制の限界を完全に超えてしまわないこと，そしてグレーツを保護している穏健な法律を制定した民族に対して，いくらかの敬意と寛容の気持ちで語ってもらいたい。」

しかし，すぐにトライチュケはグレーツの姿勢にはそのような「慎み深い要求」に応じる気配がないとして，批判する。「グレーツの歴史書の各巻は最初の頁から最後までキリスト教に対する憎しみ，野蛮な憎しみを説き，ドイツ民族に対して傲慢で挑戦的な軽蔑を説いている。」

次に，トライチュケは，グレーツの書にキリスト教はユダヤ人にとって「不倶戴天の敵」Erbfeind と書かれてあると自分の論文で指摘したことに対して，グレーツがそんな言葉は書いていないと否定したことに関しては，自らの誤りを認める。しかし，すぐにまたグレーツの本には Erzfeind「宿敵」と書かれていると指摘して，Erbfeind も Erzfeind も意味に相違はないだろう，と居直る。さらに，この言葉を単独で判断するのではなく，グレーツの本全体に見られる反キリスト教的な調子を見なければならない，グレーツの批判はシュライエルマッハーなどプロテスタント神学者にまで及んでいる，と話を広げようとする。

その後，グレーツのゲルマン人観をもトライチュケは俎上に乗せる。グレーツが「ゲルマン人，この農奴制，封建貴族と卑俗な奴隷根性の発明者」と書いている例をあげ，「グレーツ氏はドイツを決して自分の祖国と見なし

ていないと公然と告白している」と断定する。また，ゲーテとフィヒテを「第一級の男たち」と書きながら，憎しみに満ちた言葉をこのふたりに浴びせていると批判し，「グレーツのドイツに対する軽侮と手に手を取ってとてつもない傲慢さが現れる」と書く。グレーツは，「レッシングがもっとも偉大なドイツ人だった」と書いてから，厳かに「ベルネはレッシング以上だった」と請け負う。このようなことを考えて書く人間をドイツ人と見なせるのか，とトライチュケは扇動的な問いを投げかけ，自ら答える。

> 「いいや，グレーツ氏は『偶然生まれた国の』大地での異邦人，オリエンタル人であり，我が民族を理解せず，また理解しようともしない，彼は我々の市民権を保持して我々の言語を使用する――もちろん我々を中傷するためだが――以外に我々と共通点を持っていない。」

そのようなグレーツの要求することは何か，とトライチュケは問う。

「同権の一員としてのユダヤ人の承認はすでにかなり実現したが，ユダヤ教の承認にはこの先もっと困難な闘いが待ち構えている」というグレーツの言葉を引用して，ユダヤ人が宗教的共同体としてドイツで長く承認されてきているので，グレーツの要求はユダヤ民族がひとつの国民として承認されることになる，ドイツ国民のなかで，またドイツ国民と並ぶひとつの国民として。そのような要求に対するすべてのドイツ人の答えは「絶対だめだ！」以外にあり得ない，とトライチュケは強調する。ドイツ人は，同胞の一部が自分たちは神に選ばれた民族だと静かに思っていたとしても，そのことを受け入れる。しかし，ユダヤ民族がひとつの国民であることの承認まで求めるとするならば，ユダヤ人解放の土台である法的基盤が崩れてしまう。「そのような望みに応える手段はひとつしかない。国外への移住である。ユダヤ人国家をどこかの外国で建設することである，ユダヤ人は

その後に他の諸国が承認するかどうか見守ればよい。」

さらにトライチュケは語気を強める。「ドイツの大地では二重国籍の余地はない。」数千年にわたるドイツ国家形成の仕事にユダヤ人は直近までまったく参画していなかったからである。またドイツ文化の性格を決めた精神的創造の偉大な三つの時期，中世文学の全盛期，宗教改革期，古典文学期のどれにもユダヤ人は役割を演じていないか副次的な役割しか演じていない。ドイツのユダヤ人はゲルマン化することでドイツの学者や芸術家としての名声を得ることになった。しかし，グレーツと彼のようなユダヤ人は別の道を歩んでいる，とトライチュケは決めつける。

> 「しかし，我々の世論はようやくこのことを意識し始めている。あと数年もせずに，ユダヤの新聞雑誌で今日報道されている『ゲルマン人の太古の暴徒』に対する罵りの言葉は，イギリスではずっと以前から考えられなくなったように，ドイツでも不可能になるだろう。」

3

ハインリヒ・グレーツ『フォン・トライチュケ教授に対する私の最後の言葉』

グレーツはトライチュケの広汎なテーマにわたる反論に対して，自分の「最後の言葉」と断った上で以下の再反論を書いた[3)]。

> 「あなたの繰り返すユダヤ人，とりわけ私に対する誹謗は，いささか私を驚かせるものでした。あなたは私の叱責を静かに受け入れて，忘れてしまうだろうと思っていました。しかし，あなたの独善は自尊心より強力なものでした。そこで，私も黙ってはいられなくなりました。

しかし，感情的にならないように努めたいと思いますし，いずれにせよあなたが最後の論文でしたよりも品よくしたいと思います ―粗野はドイツの愛国主義にまったくそぐわないものです。あなたの罪を証明することをもちろん望んでいるわけではありません。排外主義と怒りで濁った論理にとって真実は近づきがたいものです。このような論理による判断はこうです，ユダヤ人が1500年のあいだ不当に，「悪魔的」なほど残酷に迫害されてきたがゆえに，ユダヤ人はこれからも迫害され続けなければならない。しかし，私は別の証明をしようと思います，あなたの細部にこだわる厳密さと良心的な姿勢は，あなたの歴史に関する中立性と同様に脆弱なものであるということです。」

このような前提からグレーツは論文を始めて，まず統計的な問題でトライチュケに反論する。トライチュケの論はモルプルゴの統計を基礎にしているが，モルプルゴは統計の専門家たちからは信頼されていない，と指摘する。また，ベルリンのユダヤ人だけでフランス全土のユダヤ人45,000人に匹敵するというトライチュケの主張に対して，ダニエルの地理学では1875年以前に75,000人のユダヤ人がフランスに住んでいたと書かれている。この数には，ユダヤ教という信仰を申告せず，フランス人とのみ申告したユダヤ人の数は入っていない。

また，ポーランドから下着売りのユダヤ人の若者がドイツに流入していることに，トライチュケがドイツ的本質への悪影響があると懸念を表明したことに対し，グレーツは「幽霊を恐れるようなこと」だと批判する。ポーランドに隣接したドイツの諸地域にユダヤ人の流入は見られない，主要な統計家は，この10年ポーランドとガリツィアからのユダヤ人の流入はほとんど消滅しかかっているということを証明しようとしている，とグレーツは主張する。

その後に，タキトゥスの「人類への憎しみ」という言葉に関するトライチュケの解釈について再度反論を試みる。これ以降はグレーツの本文を引用していく。

*

タキトゥスはこの言葉をキリスト教徒に対してのみ使ったのであり，ユダヤ人に対して使ったものではありません。キリスト教徒だけにネロは放火の嫌疑をかけ，キリスト教徒を残酷な拷問にかけましたが，ユダヤ人にはそうしませんでした。ネロの時代にローマにいたのはほとんどユダヤ人以外のキリスト教徒でした。すなわち，パウロの信者であるギリシア人とローマ人でした。そのことは「パウロのローマ人への手紙」と「使徒行伝」から十分にわかることです。それに反してユダヤ人はローマではそれほど嫌われていなかったので，ローマ人がユダヤ教に改宗する場合がとても多く，ユダヤ人の歴史家のヨセフスも喜んだほどでした。セネカは反対にこの傾向を嘆いていました。ディオ・カッシウスは――あなたより客観的に――冷静に書いています。「『ユダヤ人』という名前は，ユダヤ人でないにもかかわらずユダヤの戒律の遵守に熱心な他の民族の人々にまで広がっている。ローマ人の間にもこのような人々がいる。」確かに排外的なローマ人は，今日排外的なドイツ人がそうであるように，ローマ人の改宗に怒り心頭でした。しかし，ローマ人作家の悪意のある文章から民族誌的な結論を導くのは，いずれにせよ非歴史的です。

私の歴史書にあるという，キリスト教に対するいわゆる「死ぬほどの憎しみ」に関するあなたの新しい主張は，これまでのすべての主張とまったく同様に証明力がありません。あなたが私の歴史書をまったく読んでいないか，あるいは第11巻を歴史家の真摯さで読まずに，ユダヤ人に対する告発材料を集めるためだけにパンフレット作者の流儀でただめくっただけ，

ということが分かりました。パンフレット作者の流儀で，私の叙述を毒のあるものにするために，あなたは一部分を文脈から切り離し，ばらばらの内容をつなぎ合わせています。しかし，ネメシスの女神はすでにあなたを襲っています。当地の新聞はあなたのふたつの論文にまったく同じようなことをしています，あなたがユダヤ人やユダヤ教について言った好意的な言葉をすべて削除して，つなぎの部分をずらして悪意のある部分をくっつけて，あなたの印象をもっと悪くなるようにしています。

あなたが不当にも私に有罪宣告をしないように，私の歴史書を良心的なドイツの学者の徹底性で読んだとしたら，第３巻のキリスト教成立の章に，私がライマールス，ゲーテ，それどころかシュトラウスやルナンよりきわめて深い是認や尊敬の念を込めてキリスト教を論じていることが分かるでしょう。あなたの不法なやり口に烙印を押すために，第11巻の初版（1869年）からかなり経つ，最新の第３版（1878年）で初めて印刷した言葉を引用します。私はこう言っています（300頁），「その間，イエスはこれら罪人や税関吏，これら荒くれ者で不道徳な者たちを言葉と模範により自らの高みにまで引き上げ，彼らの感覚を神への愛で満たし……彼らの心を内面性と神聖さにより高貴にして，彼らの日常生活を改善することに成功した。このことは，イエスが行った最大の奇蹟だった。イエスが行った奇蹟は，耳の聞こえない人を聞こえるようにして，目の見えない人を見えるようにして，病人を癒し，死者を生き返らせることだった。人間の教育者は奇蹟を行う者より計り知れないほど優れている。」これがキリスト教のアルファでありオメガですから，これらの言葉により私がキリスト教に対する憎しみを説いたと言うのですか。そもそも「グレーツの本は最初の頁から最後までキリスト教に対する憎しみ，激しい憎しみを説いている」というあなたの表現も同様に不法です。歴史は説教するものではなく，物語り説明するものです。それから582頁になる第11巻で，キリスト教について書く機会が

まったくない頁が何百も続きます。

しかし，あなたの限度を知らない嫌疑に反論することをさらに続ける前に，あなたが恐縮することになるでしょうが，卓越した法律家と同様に客観的なある歴史家の私の歴史記述についての評価を引用したいと思います。シュトッペ教授は次のように言っています（『中世ドイツのユダヤ人』182頁）。「しかし読者は，著者（グレーツ）が誇張しすぎてあまりにどぎつい色彩で描写したという妄想にかられないようにしてもらいたい，著者は原典に厳密に忠実であり，彼の描いた絵にはまだいろいろ筆を加えることもできるだろう。」――そして中世史のように私はユダヤ人の近世史（もっぱら1848年まで）も厳密に資料に従い取り扱いました。同様に資料に従い中立的にユダヤ人の欠陥とユダヤ教の影の部分も描きました。

このような前提の上で，私はあなたの嫌疑を取り上げることにします。「Erbfeind」と「Erzfeind」のあなたの記憶違いを指摘しましたが，そもそもこの言葉を述べたのは私ではなくハイネです。――ただし，私は洗礼を受けたユダヤ人について，敵の陣営に寝返ったと言いました，けれどそれも間違った言い方ではありません。なぜなら，洗礼を受けたユダヤ人は通常ユダヤ人の敵とグルになったからです。あなた自身も現在のユダヤ人迫害を卑劣な改宗者のせいにしているではないですか。あなたが666頁で持ち出しているのは，読者の誰もが納得してしまうような，パンフレット作家のつぎはぎ細工です。

私が「実際にはシャイロックはユダヤ人ではなく，キリスト教徒だったのだ」と言ったのは間違ってはいません，あなたがこのことで私に嫌疑をかけたなら，あなたの無知として許してあげましょう。あなたはLeti in vita de Sixto quinto（レティ『シクトゥス五世の生涯』）の物語をご存知ないのです。16世紀のローマでキリスト教徒のセッキとユダヤ人のサンソーネ・コネダが賭けをしました。賭けの対象としては，ユダヤ人が負けたら１ポンドの

肉を切り取られ，逆の場合はキリスト教徒が100スクディを払うことになっていました。キリスト教徒が賭けに勝ち，ユダヤ人に肉を寄こせと言いました。しかし，教皇がふたりをローマから追放しました。このように実際にはキリスト教徒のシャイロックがいたことになります。彼の名前はパオロ・マリーニ・セッキでした。

シュライエルマッハーと『ルチンデ』に関する彼の手紙，あらゆる小説のなかでもっとも下品なこの小説の成立とこの小説とシュライエルマッハーの宗教に関する講演との関係について私が書いたことの責任は，今でも私が負います。私のドイツ諸国のユダヤ人の歴史叙述に関するあなたの嫌疑に関しては，叙述の対象はもっぱら1848年までであり，それも1868年に書いたものだとご注意します。栄光ある勝利，天才的な指導力でもたらされたドイツの統一と興隆はその後に起こったことです。これらの出来事の以前にはドイツ民族は一般にドイツのミヒェルと思われていました，私の評価はドイツの歴史家や作家が表明した一般的な判断に基づくものです。ちなみに私は，今印刷中の私の歴史書の英訳で，1870年以前では真実でしたが，今では真実ではなくなった評価を自ら書き変えました。私の愛国主義に対する嫌疑（677頁）については，あなたの間違いを指摘しなければなりません。ワルシャワ公国がプロイセンに属したのは短い期間でしかありません。ナポレオンがプロイセンと交戦し，その領土に侵入したときに，当然ながら全ポーランドがナポレオンに熱狂的になびきました，ポーランドのユダヤ人も，ナポレオンがユダヤ人を鎖から解放し，まさにその時期にユダヤ最高評議会をパリに招集していたので，ポーランド人同様にナポレオンを後押ししました。このような事実を語る際に，私はこう言いました。「ユダヤ人は，新しい制限を彼らに課したプロイセン王家に忠実で感謝するべきだったのだろうか。」しかし，あなたはこの問に自らの見解を述べました。「もちろんユダヤ人は忠実であるべきだった」と，そしてあなた

は，私があなたの言うことを全く理解していない，と言う。もちろん理解していますとも，あなたが先祖伝来の主君（ポーランド王）に反対しているのに，忠実であると主張しているということを。その際，あなたは自らのパンフレット作者の流儀を否定していません。あなたは，私がワルシャワ地方のことしか問題にしていないのに，あたかもポーゼン地方か西プロイセンのことを問題にしているかのように述べています。私が「ベルネはレッシング以上ではないのか」としか言っていないように見える引用の仕方も同じ流儀です。しかし，私がベルネについて述べた（378頁）内容は原文通りではこうです。「間もなくドイツは，レッシングを思わせるが，芸術を氷のような孤独の高みではなく生活の平地に根付かせるがゆえに，レッシング以上の作家がベルネから生まれたことを知ることになった。」偏見のない読者にとっては，このことはベルネが解放のためにより貢献したということを意味します，しかしあなたはこの一文を文脈から切り離してしまいます。

この巻の最後に私は1848年初頭に関連してこう言いました，「完全な権利を与えられた一員としてのユダヤ人の承認はすでにかなり実現しているが，ユダヤ教の承認にはまだ困難な闘いが待ち構えている。」偏見のない人間は誰でもここから，ユダヤ教や教説がまだ承認されていないこと，ユダヤ教が宗教や信仰とは見なされていないこと，ユダヤ教の聖職者がキリスト教の聖職者とあちこちで同格とは見られていないことを読み取るでしょう。しかし，あなたは私があたかもユダヤ人の国籍について問題にし，ユダヤ国籍が承認されることを望んでいるかのように非難しています。ユダヤ教と国籍は同じことなのですか。そしてこの悪意のある非難に，あなたの論文の結論に見られる誹謗のすべてが基づいています。あなたのしたような誹謗を，ユダヤ人擁護のためにドミニコ会全体と反動派を敵に回した人文主義者の指導者ロイヒリンは，「バッカス信女の狂気の議論」と名づけまし

た。教授，あなたが当時生きていたら人文主義者やユダヤ人に反対した反動派と同じ立場を取ったのですか。

全体として，あなたがどうして厚顔にもキリスト教とドイツ精神の異端審問官と自称するのか理解できません。プロテスタント神学の博士でキリスト教のさまざまなニュアンスをよく理解しているパウルス・カッセルは，あなたのキリスト教を一種の異教と名づけています。そしてあなたの国籍に関しては，あなたがスラブ民族の出自であることは，ドイツ民族の出自であることより疑いの余地のないことです。

これで終わりにします。あなたがこの先も私に論争をしかける気なら，いくらでも中傷をしたり，疑いをかけなさい。私はあなたにこれ以上応えるつもりはありません。ただひとつだけお願いしたいことがあります，良心のかけらがあるなら，私の宗教的，民族的同胞に私に書いた内容の責任を負わせないでください。間違っていたなら，その責任は私だけが負うつもりです。

1879年12月28日

*

以上見てきたように，ドイツ史の研究者トライチュケとユダヤ史の研究者グレーツの論争は，ユダヤ教史，キリスト教史，ヨーロッパにおけるユダヤ人迫害の歴史，ドイツ史など幅広い分野にわたり，歴史家としてのふたりのプライドを賭けた論争でもある。したがって，具体的に歴史的資料を引用しての論証や相手の知識の不十分さの批判が多く見られるが，両者の論争は歴史的事実をめぐるものだけではなく，歴史の評価をめぐるものでもあった。

ドイツにおけるユダヤ人の割合が他のヨーロッパ諸国よりも高いのかという統計的な問題から，ドイツにおけるユダヤ人の存在は統一されたドイ

ツという国家にとってプラスなのかマイナスなのか，ドイツという国家を強力なものにしているのか，それとも弱体化しているのかという評価の問題になっていく。

さらに，そもそもユダヤ教とキリスト教は相容れるものかどうか，という大きな問題がある。周知のようにキリスト教はユダヤ教から成立したものであり，イエス・キリストもユダヤ人でありユダヤ教のラビであった。ユダヤ教という土台がなければキリスト教が存在しえなかったことは明らかな歴史的事実であり，宗教思想としても両者は密接なつながりがある。普遍宗教としてのキリスト教は異教徒である人々に布教活動を積極的に行い，ローマ帝国の国教として認められることにより，ヨーロッパ地域の諸民族にも広く信仰されるようになった。これはゲルマン民族についても当てはまる歴史的事実であり，ゲルマン民族の一部であるドイツ人も多神教からキリスト教に改宗したわけである。このような経緯を見ると，トライチュケがキリスト教徒の立場からユダヤ人を異質なもの，キリスト教徒であるドイツ人の文化に溶け込まないものとして拒絶する姿勢は奇妙に思われる。ユダヤ人の方が，異教徒であったゲルマン民族より本来はキリスト教に近かったからである。トライチュケの反ユダヤ主義は歴史学者としての知見に基づく論理的なものでなく，極論するとドイツの文化や経済など多くの分野でユダヤ人が活躍しているのが目障りだ，という感情的なものとしか思えない。その不快感の背後には，また多くのユダヤ人が自由主義的な考えを持っていて，ドイツ統一によりナショナリズムが高揚している風潮の邪魔になるという考えがあった。このように見るとトライチュケとグレーツというふたりの歴史家の論争は，過去と現在に関する歴史観の相違に関わるだけでなく，統一ドイツをどこに導こうとするのか，という未来に関わる論争であった，と言わざるを得ない。この論争のあとに続く歴史，第１次世界大戦，ワイマール共和国，ヒトラー独裁と第２次世界大戦

という激動の歴史もふたりの論争の先にすでに薄っすらとその姿を見せている。

注

1） Der Berliner Antisemitismusstreit, Insel, 1988, S. 27–32.

2） Ebd., S. 33–46.

3） Ebd., S. 47–53.